



映画づくりの次代をひらく『京都太秦物語』

山田洋次監督に学び 共につくった2年間

立命館大学映像学部



立

命館大学は2007年に映像学部を開設した。そして松竹・立命館・京都府による産学公の連携で、映画の都京都に新しいエネルギーを育もうと、寅さんシリーズや『家族』『故郷』『幸福の黄色いハンカチ』などの山田洋次監督を客員教授に招き、同時に歴史ある松竹京都撮影所内に専用スタジオと教室を確保した。「映画は、多くのスタッフが汗をかき、ゼロからイメージを共有し、実現していく不思議な仕事です。一本の映画づくりを一緒にやることでしか教えられない。」

「かつての大船撮影所は学校だった。教え、伝え、成長する場づくりこそ必要なんです。」という山田監督の強い信念からだった。



『京都太秦物語』(2010年ベルリン国際映画祭招待作品)

大映通り商店街で育った大学図書館勤務のヒロイン、芸人を目指す幼なじみ、文字学研究者の青年の人間模様を描いた作品。第60回ベルリン国際映画祭の斬新な発想の作品を集める「フォーラム部門」に招待され、山田監督をはじめ10数名の学生も出席して注目を集めた。9月18日(土)より東京・東劇にて公開。大阪・なんばパークスシネマでも9月公開予定。公式サイト <http://www.ritsumeai.ac.jp/eizo/kyotostory/>

と日常生活の調査と映像記録、主題設定からキャラクターづくり、それらをもとにシノプシスからのシナリオ制作を行った。09年度の授業は「映画創作実践」と「学外映像研修」。準備、クランクインからアップまでの撮影、編集、音入れ、仕上げと、学生たちは「山田組」のスタッフとして、実際に助監督、照明、録音、美術などの助手を担当し、さらには宣伝と上映まで含めて、厳しい現場の全てを学んだ。

「家族団らんのシーンを20回も撮り直しました。日常そのままの再現を試みる監督の姿に圧倒されました。」(美術/山崎弘太郎さん)

「監督、スタッフみんなが向き合うなかでの、思いやり、ぶつかり合いは学校では学べないことでした。人が成長するうえで欠かせないもの、それを監督は教えなかったのだと思います。」(監督助手/古寺綾香さん)

「地道な取材や準備の連続は、実際しんどかった。しかし前よりもっと映画が好きになりました。」(撮影・照明/吉田卓功さん)

「張り詰めた本物の現場のなかで、自分がどう動けば周りのためになるか考えられるようになりました。」(美術/川崎隆博さん)

映画づくりに必要な能力や、人間や社会に向き合う力の養成、学生たちの主体的で責任を持つての実践など、日本映画の明日を担う人材づくりへ、画期的な授業だったのではなからうか。

※ シノプシス…演劇・映画など物語のあらすじ



立命館大学 映像学部映像学科

住所 京都市北区等持院北町56-1
立命館大学 衣笠キャンパス
開設 2007年4月
定員数 150人(1学年)
教育内容 映像文化、映像プロデュース、映像制作、映像テクノロジー
電話番号 075-465-1990(事務室)
<http://www.ritsumeai.ac.jp/eizo/>



撮影は、大映通り商店街、おそば屋さん、広隆寺の門前、そして立命館大学 衣笠キャンパスなど、さまざまな場所で行われた。写真提供 松竹